

一大学図書館員から見た 国立情報学研究所

中 島 秀 男

はじめに：国立情報学研究所を知っていますか？

現在、ほとんどの図書館は自館のみ、いわゆる単館主義で利用者から求められるサービスのすべてを提供できるとは考えていないことだろう。

ほとんどの図書館は他館あるいは類縁機関と連携することで利用者から求められる様々な要求に応えられると認識している。

そのような連携する他機関の中でもっとも知名度が高いのはなんといっても国立国会図書館であろう。

国立国会図書館は日本で唯一の国立図書館であり、納本制度によって流通している図書を網羅的に収集する機関として、図書館のみならず世間一般からも広く認知されている。

実際、利用者にサービスを提供する図書館員としても、自館にない資料を提供するために国立国会図書館の資料を利用したり、自館では対応できないレファレンスを国立国会図書館に転送するなど、図書館業務を円滑に進める上でなくてはならない機関である。

しかし、国立国会図書館と同等、もしくはそれ以上に日々の図書館業務を進める上でなくてはならない機関が存在する。

それが国立情報学研究所（National Institute of Information：NII）である。

この国立情報学研究所は、特に大学図書館の業務を進める上で、なくてはならない機関であるが、公共図書館員の方には国立国会図書館ほどの知名度がなく、図書館員ではない一般の方からはほとんど話題に上ることもない。

そこで今回は、この国立情報学研究所が提供するサービスを、一大学図書館員としていかに活用し、その恩恵にあずかっているかを述べていきたい。

国立情報学研究所とは

国立情報学研究所とは、『情報学という新しい研究分野での「未来価値創成」を目指すわが国唯一の学術総合研究所』であり、1976年に東京大学に設置された『東京大学情報図書館学研究センター』に端を発する。その後、1983年に『東京大学文献情報センター』、1986年に『学術情報センター』と形を変え、2000年に『国立情報学研究所』、2004年に『大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所』となり、現在に至る。

国立情報学研究所は、『情報学という新しい研究分野での「未来価値創成」を目指すわが国唯一の学術総合研究所』として、様々な研究を行い、様々なサービスを提供しているが、そこでは、それらのサービスの中で、特に大学図書館員にとって重要なサービスである「NACSIS-CAT」、「NACSIS-ILL」、「CiNii」、「Webcat Plus」・「NACSIS-Webcat」、「GiNii」、「教育研修事業」を紹介する。

N A C S I S - C A T

現在、所蔵する図書・雑誌類を管理するために、ほとんどの図書館がコンピュータを利用している。

そしてそのコンピュータに格納する資料の書誌データをすべて自館で作成している図書館は、おそらくほとんどないだろう。

国立国会図書館が作成する書誌データ「JPMARC」や、図書館流通センターが作成する書誌データ「TRC MARC」などから必要な書誌データを取り出し、自館のコンピュータに登録し、利用するのが一般的である。

大学図書館でも同様に、すべての書誌データを自館で作成せず、この「NACSIS-CAT」を利用しているのが普通である。

「NACSIS-CAT」とは、国立情報学研究所が提供し、国内の研究機関、大学図

書館が主として参加するオンライン型の「目録・所在情報サービス」である。

この「NACSIS-CAT」は、参加機関が共同で書誌データを作成しているのが大きな特徴である。

従って、参加機関は、資料の書誌データがNACSIS-CATに登録されていれば、その書誌データをダウンロードして利用し、資料の書誌データがNACSIS-CATに登録されていなければ、その書誌データを自館で作成し、NACSIS-CATに登録していくことになる。

さらに、NACSIS-CATは、参照MARCとして、JPMARCやTRC MARC、英国図書館が作成しているUKMARC、アメリカ議会図書館が作成しているUSMARCなどの各種MARCを利用できるようになっているため、NACSIS-CATに登録されていない資料であっても、その書誌データが他の参照MARCに登録されていれば、比較的簡単にNACSIS-CAT用のMARCに修正できるようになっている。

また、参加機関はNACSIS-CATの書誌データをダウンロードして利用するとともに、自館がその資料を所蔵していることをNACSIS-CATに登録することができるようになっている。

このため、NACSIS-CAT上に登録されている書誌データからは、その資料がどの機関で所蔵しているかを知ることができる。

2007年1月13日現在、参加機関は1,145機関、図書の書誌データが8,397,374件、雑誌の書誌データが292,804件、図書の所蔵データが87,131,276件、雑誌の所蔵データが4,268,528件という膨大な件数に及んでいる。

なお、NACSIS-CATのデータは後述する「Webcat Plus」・「NACSIS-Wwbcac」で一般に公開されている。

NACSIS-ILL

利用者から、自館が所蔵していない資料を求められたとき、図書館は「図書館間相互協力 (Inter Library Loan : ILL)」によって、他図書館からその資料を借り出したり、必要箇所を複写の上、送付してもらうことで、利用者に情報

提供サービスを行う。

図書館間相互協力を行う場合、目的とする資料がどこの機関で所蔵しているのかを調べ、さらに相手館との交渉が必要になるが、これをNACSIS-CATに登録されたデータを用いて省力化できるサービスNACSIS-ILLである。

NACSIS-ILLで、他機関に資料借用や複写を依頼する場合、まず、借用か複写かを選択し、目的とする資料を同定する。

次いで、その資料を所蔵する機関の貸出条件や複写条件、料金支払方法等が参照できるので、それらを参考にしつつ、依頼先館を決定する。

依頼先館は複数選択できるので、必要がある場合は複数館選択して、「依頼」操作を行えば、後はシステムが相手先機関にILL依頼を届けてくれる仕組みになっている。

相手先機関が何らかの事情で依頼を謝絶した場合、依頼先館を複数選んでいた場合は、自動的に他機関に転送されていく。

また、NACSIS-ILLからは、国立国会図書館や英国図書館といったNACSIS-ILLに参加してはいないが、図書館間相互協力上重要な機関にも依頼を行うことができるため、簡便にそれら外部機関に対して依頼を行うことができる。(ただし、NACSIS-ILL上での国立国会図書館への依頼は、残念ながら2007年3月末で終了する予定である)

さらに図書館間相互協力で発生した料金は、切手での支払、口座振り込み、現金書留での送付、為替での送付、という多くの方法から選択され、また、相互協力依頼毎に支払をしなければならないため、その事務作業にはかなりの煩雑さを伴う。

しかし、2004年度から、「料金相殺サービス」が始まった。

「料金相殺サービス」とは、NACSIS-ILLを通して、料金相殺サービス参加機関同士で相互協力を行った場合、そこで発生した料金を国立情報学研究所が記録し、四半期に一度、参加機関毎にその結果を送付してくれるサービスである。

これにより、相殺サービス参加機関同士の相互協力であれば、4ヶ月に一度

料金を支払う（または受け取る）だけで済むため、大幅な事務の省力化が可能となった。

2005年度NACSIS-ILL参加機関は985機関に及び、処理を行った貸借件数が100,742件、複写件数が1,098,532件となっている。

C i N i i (<http://ci.nii.ac.jp/>)

CiNii(サイニイ)とは、NII論文情報ナビゲータ (NII Scholarly and Academic Information Navigator) の略称で、学術論文情報を検索の対象とする論文データベース・サービスである。

雑誌論文情報を検索対象とするデータベースというと、国立国会図書館のNDL-OPACで提供されている雑誌記事索引が思い浮かぶが、CiNiiは、国立国会図書館の雑誌記事索引を含めた複数の論文データベースを統合したことで、様々な論文を検索できるようになっている。

さらに、CiNiiで検索された結果に本文へのリンクが張られている場合は、その本文も参照することができるようになっている。

CiNiiは、個人でも利用できるため、大学図書館だけがよく使用するサービスではないが、大学図書館の多くが機関定額制に加入しており、有料で提供されるサービスの一部は機関定額制の構成員は無料で使えるため、やはり大学図書館にとって身近なサービスである。

W e b c a t P l u s ・ N a c s i s - W e b c a t

網羅的に図書を検索したい場合、納本制度によって図書を網羅的に収集している国立国会図書館の蔵書検索システム「NDL-OPAC(<http://opac.ndl.go.jp/>)」を利用する場面があるが、検索対象が学術図書であったり洋書である場合は、大学図書館の総合目録であるNacsis-Webcat (<http://webcat.nii.ac.jp/>) を使用するのが非常に有効である。

というのもNACSIS-CATの機能は前述したとおりだが、この情報を加工し、イ

ンターネット上に公開しているサービスがNacsis-Webcatであり、NACSIS-CATを通して登録された各大学が所蔵している学術図書・洋書を網羅的に検索できるからである。

しかもNacsis-Webcatでも、NACSIS-CATと同じく、検索した資料を所蔵する機関も表示されるため、利用者に他機関を紹介するときなどにも有効に活用できる。

Nacsis-Webcatデータに出版者等から提供されるデータを加え、さらに機能を拡大・充実させたデータベースがWebcat Plus (<http://webcatplus.nii.ac.jp/>)である。

Webcat Plusは、Nacsis-Webcatと同じ一致検索に加え、「連想検索」機能が搭載されている。

この連想検索は話し言葉や文章のような自然言語を入力すると、そのテーマに近い図書を検索することができるというもので、曖昧な情報からも図書を検索することができる。

またWebcat Plusの検索結果は、Nacsis-Webcatと同じ書誌データ・所蔵機関情報に加え、(データがあれば、だが) あらすじや目次情報も表示される。

以上のようにNacsis-WebcatとWebcat Plusは図書を検索する上で役立つツールであり、大学図書館でよく使用されるサービスであるが、両サービスともインターネット上で公開されているサービスであり、アクセスさえすれば誰でも使用できる。

GeNii (<http://ge.nii.ac.jp/>)

GeNii (ジーニィ) とは、「NII学術コンテンツ・ポータル」のことで、CiNiiとWebcat Plusに加え、科学研究費成果公開サービスのKAKEN、学術研究データベース・リポジトリのNII-DBRの4つのデータベースを統合して検索することが可能なサービスである。

GeNiiは、何らかの事柄に対して広く情報を収集したいときに有効に使えるサ

サービスであるが、このサービスもインターネット上で公開されているサービスであり、アクセスさえすれば誰でも使用できる。(ただし、CiNiiで有料で提供されているサービスはGeNiiを通して検索した場合も同じく有料となる)

教育研修事業

国立情報学研究所では、学術情報基盤を支える人材の育成に積極的に取り組んでいるが、その一つの方法として様々な研修活動を行っている。

用意されている研修には、NACSIS-CATの使い方を学ぶ目録システム研修会やNACSIS-ILLの使い方を学ぶILLシステム研修会に加え、情報セキュリティ研修会やネットワーク管理者研修などがあり、国立国会図書館や日本図書館協会が実施する研修に比べ、いわゆるIT技術に強いのが特徴である。

国立情報学研究所が実施するこれらの研修は原則無料で実施され(研修によっては日当がつく場合もある)、図書館業務を円滑に進める上できわめて有効な技術を学ぶことができる。

おわりに

以上、国立情報学研究所が提供するサービスのうち、私が大学図書館員として有効に使っているものを駆け足で述べてきたが、もちろん利用しているサービスはこれだけではなく、それ以外にも役立つサービスが数多く存在する。他の図書館員からすれば、まだ重要なあのサービスが述べられていないと思う人もいるかもしれないし、図書館員でなくても、ほかに国立情報学研究所が提供しているサービスには何があるのかと興味を覚えた人がいるかもしれない。

国立情報学研究所が提供しているサービスは国立情報学研究所のWEBページ(<http://www.nii.ac.jp/>)で解説されているので、興味を覚えた人はぜひwebページを参照してほしい。

所属：聖学院大学総合図書館司書課（2006年執筆等）